

お宝探訪

Treasure
4

今里傳兵衛の遺徳を示す「桧笠」

郷土資料館の大事な仕事のひとつに、播磨町の歴史を彩る様々な資料の収集や保管があります。本年度は、数ある資料館の収蔵品のうち、代表的なものを紹介していきます。広報はりまの掲載月にあわせ、関係資料を展示します。ぜひ本物を見に来てください。

播磨町郷土資料館 ☎079(435)5000

播磨町ゆかりの江戸時代で代表的な人物といえば、決死の覚悟で新井の開削工事を指揮した今里傳兵衛重幸でしょう。今里傳兵衛は、今から350年ほど前の江戸時代前期の人で、加古郡古宮組大庄屋(庄屋を支配し、地方行政を担当した村役人で、苗字帯刀が許されていきました。法規の伝達、年貢割り当て、訴訟の調停などを行いました)の家に生まれました。

川大堰のある加古川の東岸から播磨町古宮にある大池までの全長14キロメートル弱が開通したのは、明暦2(1656)年3月のことでした。

工事は大変な難工事であったよう

うで、『今里傳兵衛と新井の歴史』(新井水利組合連合会 1998年)には、「傳兵衛重幸は毎日桧笠をかぶり、連日水路地域を見て回り、高きを掘り崩し、低きは埋め、岩を砕き、堤を築き、石を積み、所々に樋門を設けた。(中略)当時の大庄屋といえば、人望もあつく格式をもっていたので、郷民を駆使して直接手を下す事は少なかったが、傳兵衛重幸は熱心に工事の監督に精を出し、夜分といえども提灯を携えて検分したという。」と書かれています。

被る道具で、檜の薄い板を組み合わせて作ったものです。正面には「丸に橋」の今里家の家紋が入っていて、古宮の良仙寺に傳兵衛の遺品として伝わり、箱には「陣笠」と書かれています。

この新井の開通のお陰で、周辺の田は「井がかり」となり、その後は「日やけ知らず」となったことから、人びとに感謝されました。開通から93年後の寛延2(1749)年、姫路藩内の各地で大一揆が起こり、藩内各地の大庄屋が打ちこわされましたが、なぜか古宮組大庄屋は襲撃から免れたそうです。新井の開削に命をかけた傳兵衛の威徳を、農民たちが忘れていなかったといふことも一因であったかもしれません。

承応3(1954)年は春からほとんど雨が降らず、江戸時代を通してこの年だけ「年貢なし」となるほどの干ばつで、稲作は致命的な打撃を受けました。この悲惨な状況をみた傳兵衛は、何度も現地を踏査して緻密な計画をたて、姫路藩主に加古川の「五ヶ井」から分水して新しい水路の建設を陳情しました。

工事は翌年から始められ、加古や雪、直射日光を防ぐために頭に

播磨町郷土資料館 館長 井守徳男



▲傳兵衛愛用品と伝わる「桧笠」



◀「五ヶ井」から分水した「新井」(右側水路)の起点付近